

学力の基礎をきたえ どの子も伸ばす研究会ニュース

学力研の広場

ホームページアドレス <http://gakuryoku.info/>

NO. 355

2025.9.6

学 力 研 発 行

常任委員長 岸本ひとみ

ペイペイ銀行うぐいす支店 普:3607141

8月2日、エル大阪にて、学力研の全国フォーラムが開催されました。連日続く猛暑にも関わらず、全国各地から学力研の仲間たちが参集しました。会場のあちらこちらで「会えてよかった!」「久しぶり」「元気そうですね」というやり取りがなされており、年に一度、ここで学力研の仲間が一堂に会するという伝統が続いていることをうれしく思いました。コロナ禍以後、ZOOMでの会合や学習会も増えてきましたが、やはり直接会って近況を伝え合ったり、お互いの実践について話をしたり、講座から学んだことを話し合ったりすることも欠かしてはならないのだと痛感しました。午前中は、全体会として基調提案、実践報告、そして立命館大学の宮口幸治さんの記念講演がありました。午後はそれぞれの学年別講座や文化会に分かれて講座を行いました。どの会場も参加者の熱気に満ち満ちており、「どの子も伸ばす」に全力を尽くす学力研教師の魂を強く感じました。各講座の内容を、常任委員の皆さんにまとめていただきましたので、当日参加された方も、残念ながら参加できなかった方も、ぜひお読みください。(加藤)

CONTENTS

◇ 全国フォーラム2025 各講座のまとめ ◇

実践報告「できる・わかる・つながる」でどの子も伸ばす学力づくり

塩田まなみ・・・1

記念講演『頑張れない』子をどう導くか～基礎学力と認知機能を伸ばす～

加藤 英介・・・2

1年生講座

川崎 和代・・・4

2年生講座

吉田 雅直・・・6

3年生講座

山口左知男・・・8

4年生講座

図書 啓展・・・10

5年生講座

古東 秀一・・・12

6年生講座

荒井 賢一・・・14

家庭教育&中学・高校分科会

影浦 邦子・・・15

◇連載◇

「どの子も伸ばす」を本気で考える 82「意欲格差」に負けない! 公立小学校へ

岡本 美穂・・・16

考える力をつけるための授業の組み立て方⑩ワンテンポ置くことで考えさせる

荒井 賢一・・・18

社会科(歴史)授業力アップ講座⑩社会科の歴史

深沢 英雄・・・20

学力は『ごめんなさい』にあらわれる・・・紹介

金井 敬之・・・22

局長・常任委員長だより

・・・24

学力研カレンダー

・・・25

私たちは、毎日子どもたちにとのよう
な学びを保障しているでしょうか。それ
は、日々の授業の中で欠かせない基礎学
力となる読み書き計算をさせるだけで
は持続可能な学びの保障にはならない
と考えます。そのためには、ちょっとした
工夫が必要です。吉田先生からは、子ど
もたち一人ひとりがきらきら輝ける学
びの成長が学級集団の中で育まれ、互い
の信頼を築いていくことであると話され
ました。では、どのように基礎学力をつ
け、学びの保障をされているのでしょ
うか。吉田先生の「学力づくりで学級つ
くり」でわかるつながる中で、どの子
も伸ばす「」をテーマに実践報告してい
ただきました。

〈学級づくりとしての音読〉

授業のはじまりのチャイムと同時に音
読をはじめ、遊びのモードから学習モー
ドへ切り替えていきます。子どもたちに
チャイム着席を促すことなく、能動的に
授業準備をスタートし、みんなで声を合
わせる心地よさ＝快適な情動にさせな

がら、連れ読み→斉読み→リレー読み
と展開していきます。ここでは、声の質の
こだわり方を模擬授業形式で学びまし
た。声の質には「張り・切れ・明るさ」が大
じです。合い言葉で「あしはべったん」「り
ようてはピン」「声を張って読みましよ
う。」のめあてを意識させながら読み進
めていきます。子どもたちは、「さあ読む
ぞ」と意気込んだ声になることを予想さ
れますが、三つめの「声を張る」は、声に
出すや、叫ぶとは違います。よく、動物
の声で声の大きさを例えることがありま
すが、「声を張る」というのは、そうでは
なく文字の大きさに合わせ、息を深く吸
い込む発声をするということなのです。実際
に1年生の教材「おおきなかく」の題名だ
けで発声練習をしました。息を吸って吐
くタイミングで「おおきな」で切り、もう
一度息を吸って「かく」と読みます。さら
に、「お」と「か」の文字に声の張りを付け
加えるだけで、読み方がぐんと変わる
のがわかんと思います。

音読は、すらすら全員が読めるだけで

はなく、読むこと一つひとつを価値づけ、
音読の心地よさを実感し、他者と聴き合
う関係につなげていくことが、学級みん
なのやる気の声に変わっていくと話して
いただきました。

〈漢字指導を教室文化にする〉

久保齋著「つぶやき漢字ドリル」は、構
成要素に分けて言語化しながら再生可
能な知識で漢字が覚えやすくなること
が実践されています。筆順を数字で唱え
るのではなく、「とめはねはらい」やカ
タカナの形を唱えることで、ていねいに
正しい筆順でかけるよさ、そして子ども
たちが、自分で漢字のつぶやき方を考え
るようになることで、漢字がクラスの共
有財産になり、つぶやき漢字が教室の文
化になります。漢字の学習が、個人の学
習ではなく、豊かな交流により、共同で
学び合えるつながりができます。

〈自信を育てる百マス計算〉

2年生は、たし算から、3～6年生は、
かけ算からとりくむことが効果的です。
タイムを記録しながら一定期間、毎日続

けていくことが大じです。きのうの自分
に負けてしまっても、そのパワーをため
て明日のチャレンジにつなげていくこと
を促します。たまったパワーで一気に飛
躍する「ブレイクスルー」が必ずやってく
ることを実感させることで子どもたち
一人ひとりの努力が成長につながり、自
信につながっていきます。得意な子も、に
がてな子も、毎日全力でとりくむことで
格差を解消することのできる良さがあ
ると話されました。

このように、音読、漢字、計算などの学
力づくりに「自信、共同、つながり」と言
った学級づくりの視点を入れるだけで、子
どもたちは、きらきらと輝き出し、やる
気にあふれた学級になると吉田先生は、
学力研で学ばれたことを実践し、報告さ
れました。子どもたちの学校生活のほと
んどが授業時間です。みなさんの学級の
気になる「この子」は、みんなと共に学び
合えているでしょうか。「この子も伸ばす」
という学力研が大じにしている実践は、
幾時代においても変わらず、私たち教師
の知恵と工夫によってこれからも受け継
がれていくことでしょう。

『頑張れない』子をどう導くか

加藤 英介

はじめに

教室を見渡すと、勉強ができる子もいれば苦手としている子もいます。苦手な子は、どこにつまずいているのでしょうか。また、何に困っているのでしょうか。読むことや書くこと、聞くことや話すことなど、一人ひとりの困り感はさまざまです。

今回は、そのような困り感の根源を解くきっかけを知りたい・聞きたいという思いで宮口先生をお招きし、お話を聞かせていただきました。

講演内容

『絵を写してみよう』という言葉が聞いたとき、通常であれば容易に写すことができる絵でも少年にとつては、難しいものでした。」という言葉から始まった講演会でした。「写す」という行為が苦手な子どもに困っているのではし

うか。それは、直線の位置を把握することや点をつなぐことができないなど、聞く力と見る力が弱いということが原因として考えられます。また、ものを模写するということが難しい子にとつては、見ることや書くことを同時に行うことに困難を抱えているため「〇〇しなさい」と言われてもほとんど身に付けることができません。これらは、認知することが難しいのです。「キーキが切れない」という本でもお伝えしましたが、切れないことが問題ではなくその根本にある捉え方・認知を問う正さなければなりません。そもそも認知とは、五感(匂う・見る・聞く・触れる・味わう)を通して、計画を立て実行して初めて結果となる一連の過程のことを指します。認知(感じ方・考え方)だけを指導する方法もあります。が、それだけでは効果が低くなります。現状、知的障害や発達障害に対しての支

援は多くあります。しかしながら、グレーゾーンである境界知能の子たちにはありません。

境界知能の子には、5つの特徴があります。認知機能(見る力・読む力が弱い)・感情統制の弱さ(すぐにキレてしまう)・融通のきかなさ(思考が固い、多くの選択肢が持てず問題解決能力が低い・対人関係で困る)不適切な自己認知(自分を正しく評価できない・問題点がわからない)対人スキルの乏しさ(適切な対人認知ができない会話についていけない)不器用さ(自分の体の動きが予測できない体の動きは隠せない)です。

そのような子どもたちには、授業を受けるための基礎や土台から作る必要があります。教育には「学習能力の向上・社会性、運動機能の促進」が大切ですが、今の学校教育では圧倒的に足りません。いくら教えてもらっても土台である基礎体力(筋力持久力敏捷性柔軟性集中力)と認知機能(記憶言語理解、注意、知覚、推論・判断)がなければ教科学習は難しいのです。

そこで、開発されたのが学習の土台を築く教育トレーニング「コグトレプログラム」です。コグトレとは、「覚える」「数える」「写す」「見つける」「想像する」力を伸ばすための、紙と鉛筆を使って取り組むものです。本の中には、コグトレの使い方や効果的な進め方、学校現場や家庭でできる認知機能の弱い子どもを見つけるスクリーニング検査、効果検証などが紹介されています。

学校現場でも、コグトレを使った実践が広がっています。ある小学校では、コグトレのプログラムを毎日10分程度行うことにより、「文字がうまく書けない」ということに困っていた子が一年間かけてできるようになったり、数年かけながら通常学級で学習することにより、自信を取り戻すことができるようになったりという効果が少しずつ表れています。

最近、ダイバーシティや多様性という言葉をよく聞きます。多くの人じゃ、その意味をできないことも認めていくべきと捉えています。本当の多様性とはみんなと同じことができるようになってか

らだと考えています。声なき声を拾い本来に必要な子どもたちを支援するために、いつでもどこでも気軽にできる「コグトレ」を使ってみてはいかがでしょう。

おわりに

講演を聞かれた先生方からの感想も載せさせていただきます。

境界知能の子どもたちの見る世界、そして彼らの困り感をのぞき、伸ばすコグトレについて端的に知ることができました、印象に残ったのは境界知能の子どもたちが十分な配慮をされぬままに失敗を繰り返してしまうという悲しい状況です。本校にもそういう子どもたちが多くいます。しかし、現場では「できない」で片付けられてしまい彼らが世界をどう捉えているかまで「認知の歪み」という観点を持ち、その子の世界や困り、つまづきを捉える努力がプロとして教師に求められる力なのだと思います。認知機能を回復させるコグトレ。「探す」「線で結ぶ」といった基本的な学習活動が身に付いていないというアセスメントからそれ

をトレーニングするという手続きが科学的だと思いました。科学的だからこそ、子どもに力がつき、一般化していきます。本当の意味で学力をつける方法がもっとと広がってほしいと思います。私自身、方法を広めるとともに目の前の子どもの世界を見取り、伸ばす工夫を続け伸ばす教師でありたいと思います。

『『できないことは多様性ではない』子どもたちはみんなできるようにしたい』と思っている』という思いを教師は持つており、そのために努力し工夫し悩みます。目の前の子供達を救うアイデアや考え方をいただきました。きてよかったです。

今回、初めて学力研の講座に参加させていただき、宮口先生の講演内容と学力研の理念のとても関心するとともに、私も心の中で「このままでよいのだろうか」と疑問に思っていたことに対して、答えをもらったような気がします。子どもたちが笑顔になるよう、その子にとっての必要なことを見極め、大切に育てていきたいと思いました。

1年生講座まとめ

川崎 和代

学ぶ楽しさを味わい、みんなで高め合う

算数の授業づくり

福島 尚

一年生の算数の教科書。挿絵が多く、数を数えたり、足し算や引き算の立式をして答えを出したりというシンプルさ。このような教科書を使って福島さんは、どのような算数の授業をつくっているのでしょうか。

シーンとした授業や、いつもの一部の子が主導権を握る授業ではなく、ワイワイガヤガヤ言いながら、考えを引き出し、子どもどうしで話し合い、わかる授業をめざしています。そのポイントを教科書の例題を示し、具体的な場面を取り上げて報告してくださいました。

教科書を見ると、挿絵や図の示し方で、正解に導いてしまうようなものが多いです。このページからは、この式になるのが当然と思われるような場面でも、いきなり立式させるのではなく、答えに直結するような一部分を隠したり、教科書の絵図をスライ

ドにして1枚ずつ見せたりと、示し方を工夫して子どもに「どんなお話になるかな。」と投げかけます。子どもは今までの体験を出し合い、何を使えばよいか考えます。違う意見が出てきても「どうする?」「どうして?」と投げかけ、しっかりと意見を言い、聞いてもらいます。正解に早くたどり着くことではなく、話し合い、聞き合う過程が楽しく、自分の意見が価値づけられることに意味があります。

この投げかけ方には、「情報の空白」という視点があるそうです。情報量が少なすぎると見通しが持てなく意欲が起こらない。情報量が多すぎると考えなくてもわかるので学びが少ない。ほどよい情報量が考える力を引き出します。また自分が知っている情報が増えるほど知らない領域について強い好奇心を抱くようになるそうです。

また、日々の積み重ねの実践として、フラッシュカードで声を出させる30秒チャレンジ、仲良し10(テン)ゲーム、の紹

介がありました。

私が印象に残ったのは、授業の最初やまとめで「みんなが困っていたことは……?」という投げかけの言葉です。「あなたが……」ではなく「みんな」。授業を客観的に振り返る機会であり、自分意識から脱却して全体に意識を迎えられる言葉だと思いました。

国語 自分の世界を広げる1年生

岸本 ひとみ

18名の学級。その中でフリースクールに通う児童、多国籍の児童が在籍するという学級編成の中で、国語の力をどのように獲得していくかを1年間の見通しが持てるように時系列に沿って示してくださいました。月ごとに主な教科書教材の扱い方のポイントを中心に、朝の会や「あのねノート」の取り組みもどのように進めるかをお話してくださいました。

一学期の朝の会では、「あいさつリレー」から始めたそうです。一人ずつ次の人に向けて「○○さん、おはようございます」と

送っていくというのですが、声の出し方を学ぶ場になります。そして次の段階では、スピーチに移行していきます。「好きな食べ物」などのテーマと3文以上の構成という条件を示します。これなら準備もできて、話すことのハードルもクリアできそうです。授業ではひらがな学習と教科書教材を進める中、標準語を使うことを意識して音読に取り組みました。

「つぼみ」という説明文の単元では、教材文を学習した後の言語活動として、つぼみの特徴を出し合い、みんなで説明文を書くという活動をしています。

また週2回のペースで「あのねノート」を書くことも始めました。ただ「書きましよう。」ではなく、「わたしのたからもの」や「かぞくしようかい」などのテーマを設定しています。

さて、2学期以降。さらに国語の力で世界を広げていきます。

朝の会では、「めあてリレー」の導入です。今日の自分のめあてを次々と発表します。学習のめあてでも生活面でのめあてでもかまいません。

漢字の学習では一文字に2音以上の読みがあることに戸惑うそうです。

文章の理解を助けるための挿絵がありますが「やくそく」という単元では、挿絵の影響にひっぱられることなく内容を理解していく移行期の教材だそうです。「おおむしはなんびき出てきますか？」という発問で挿絵に惑わされず、文章に立ち止まって考えることになりました。

「うみのかくれんぼ」では、授業でノート見開き2ページを使い、右ページは授業中の板書を写し、左ページには、右ページのその生き物の隠れ場所や特徴を読んで、その生き物にお手紙を書くという活動をされたそうです。このノートの指導法は、他の教科にも応用できると思いました。「じどう車くらべ」「どうぶつの赤ちゃん」など説明文の単元では自分で調べたことを、その文章構成型に習って説明文を書くという言語活動がありますが、子どもの実態に応じて、みんなで書くか、チームで書くか、個人で書くかを見極めることが大切だと思います。

他にも、研究授業に適した物語場面、音

読会にぴったりの教材など提示してくださいました。

岸本先生の報告を聞いて、2学期からの展望が開けたのではないのでしょうか。

国語の授業だけでなく、朝の会や宿題などでも、言葉を通して、日々の生活のたわいのないことを豊かにする活動を積み上げているのだなと思いました。

2本の報告と参加者からの意見、感想から

- 教科書中心の基本的授業を軸にしながら、目の前の子どもにどんな力をつけたいか、次のステップはどこかを意識して実践することが大切

- 授業づくりで積み上げた力は、係活動が自主的な活動になるなど自治的な力にも波及していく

- 全体指導の中で、困り感を取り除く教師の配慮や工夫が格差を埋めていく

- 1年生だからこれでよいとかこんなものではなく、目の前の子どもの実態や成長に応じて指導することで、1年生でここまでできる、こんなことまでできるに高められる。

学年別講座 二年生

大阪 吉田雅直

講座①「みんなで伸びる基礎学力づくり」

大阪 橋口佳世 先生

支援学級の担任を四年間された後、二年生の学級担任をされている橋口先生は、支援担の経験を生かし、張り紙などの視覚支援で「見える化」しながら、ひとりひとりができるようにルールの徹底に取り組んでおられました。その結果、個別対応の必要がなくなり、自分たちで考えて行動することができ子どもたちへと変化していったそうです。いちいち先生に確認しにくるのは低学年のあるあるですが、そこにこだわりを持ち「自分たちで考えて行動できるようにすること」を目指し、取り組まれていることが、子どもたちの「自治の力」を育てることにつながっていることを強く感じました。

班活動にも丁寧に取り組まれていました。班長は一週間の輪番制で、班全員が次の授

業の用意ができていくか確かめ、声のかけ合いをする、給食を時間内に食べる、わからないことがあったら教え合う、など、助け合っている姿が見られたら班のポイントをあげて五つたまったらシールという取り組みによって、休み時間明けのもめごと減ってきているそうです。班活動を活性化させるためのシステムづくりや具体的な取り組みの数々が大変参考になり、二学期から取り組んでみたいと思いました。

授業づくりでは「なんでも⑩ゲーム」の取り組みが印象的でした。十の補数を言うだけのシンプルなゲームなのですが、算数の時間のはじめに設定することで、子どもたちが急いで帰って来るようになり、授業のスタートがスムーズになったそうです。まさに、「学力づくりで学級づくり」の取り組みだなあと感心させられました。

フラッシュカードも、四月は一年生の復習

のくり上がり・くり下がりのないたし算・ひき算、 $\leq$ 明けからはくり上がり・くり下がりのたし算・ひき算に取り組むことで、六月からの筆算の学習がスムーズになるように見通しを持って取り組んでおられました。

筆算の指導では、子どもたちひとりひとりが色を塗ったオリジナル「くりぼう」を使い、「くりぼう、よばなあかなかな?」「おい、くりぼう!」と楽しい雰囲気できり上がり・くり下がりの確認をしている様子が伝わる実践報告でした。一行空けるための棒マグネットの活用など、細かい所まで行き届いた配慮が心に残りました。

マス計算ではくり上がりのない三十六マスからはじめて四十九マスに取り組んでおられ、答え合わせの仕方も含めて、苦手な子にもやさしい取り組みになっていました。参加者のみなさんと実際にマス計算を体験できたこともよかったです。

文章問題では、立式に必要な数字を丸で囲んだり、演算決定に必要なキーワードに波線をひいたり、といった視覚支援がどの子にとっても有効であることを改めて感じさせられました。

他にも、ストラックアウトを使ってみんなですぐ楽しく計算練習したり、図工の作品や指導のポイントを教えていただいたり、二期期が待ち遠しくなるようなアイデアをたくさん紹介していただき、わくわくがいつぱいの大変充実した盛りだくさんな講座でした。

講座②「国語力を高める話す活動とは」

京都 宮川佳代子 先生

教師歴五十三年目にして今まで一番大変な二年生のクラスを担当されているというお話からスタートしました。一年生の時は体育倉庫の屋根に乗って逃げ回っていた子に「あなたはどしたいの?」「自分のことは自分でできるのよ」とことん寄り添い、「すわっている」「やろうとしている」など、どんな小さな成長やがんばりも見逃さず、とことんほめて、ほめて、ほめちぎって、四か月かけて人間として立派に成長させてこられたというお話に、一気に引き込まれました。

また特別な配慮が必要な子が「特別扱い」にならないよう、いいかげん(?)な発達曲線をかいて、ひとりひとりの発達段階がちがひ、

目標がちがうのだから、指導もちがって当たり前ということや二年生にも納得できるように説明されているというお話には深い感銘を受けました。

班長会議の実践も興味深く、班長を集めて困っていることや気づいたこと、やってみたいことなどを出し合い、そこで解決できないことは学級会に持ち込んでみんなて話し合うそうです。班長会の司会も、はじめは先生がしますが、少しずつ班長に司会を任せていき最終的には、先生がいなくても班長会ができるようになるというお話をうかがい、このようなきめ細かい実践の積み重ねが「リーダーを育てる」ということがよくわかりました。

話す・聞くの指導では、主語と述語のある文で話すことや、「はじめ・中・おわり」を意識すること、子どもたちの発言を「つなぐ」ということ、そして何より、子どもたちが「話したい」「聞きたい」と思うような「しかけ」を日常生活の中にたくさん散りばめておられることが心に残りました。

物語文の指導では、「お手紙」で「登場人物のようすから気持ちを考える」という到達目標で授業をどう組み立てるかという実

践的なお話をうかがうことができました。「お手紙をもらったことがなくて悲しんでいるがまくんをほつたらかしにして家に帰ったかえるくんは冷たい」とゆさぶりをかけることで、その後のかえるくんのどの行動から「やさしさ」がわかるということを考えさせるなど、発問ひとつで子どもたちの深い思考や豊かな交流を引き出すことができることがわかりました。

また、感情曲線を使って、がまくんとかえるくんの気持ちの浮き沈みを考えさせ、その根拠を話し合わせることで、読みが深まり、豊かな交流が可能になることが具体的にわかりました。言語化が苦手な子でも「うれしくなった」「悲しくなった」かの二択なら、安心して参加できるということが感情曲線のよさなのだを教えていただき、ぜひ取り組んでみたいと思いました。

どちらの講座も、生の資料や体験活動もあり、参加者からの質問もたくさん出て、活発な交流ができ、あつという間の三時間でした。二期期に向けて元気をもらいましたという感想も多く、充実した学年別講座でした。

三年生講座まとめ

山口 左知男

十三名の参加

今回の二つの報告はいずれも、まさに今の三年生の教室が直面している課題に真正面から応えるものでした。

一つ目の報告は、静岡県鈴木基久さんによる「つまずきを減らす三年算数授業」。会場に立った鈴木さんは、手にさまざまな教材や手作りの教具を携え、穏やかな笑みを浮かべながらも、目には子どもたちの学びを支えたいという強い光を宿していました。

テーマは、三年生の算数における最大の山場とも言える「わり算」と「1あたりの量」。「ここに焦点を絞り、「子どものつまずきをいかに減らすか」という視点から数々の提案を披露しました。

例えば、あまりのあるわり算につまずく子どもには、学年の枠を超えて、四年生で習う筆算形式を先に教えてしまうという柔軟な対応をしていました。文章題の立式で何算か判断できない子どもには、全学年対応の「1あたり量演算決定フローチャート」を使って整理し、もやもやした頭の中を一気にクリアにしました。かけ算の筆算でつまずく子どもには、鈴木流「かけ足し算」で、二段階計算に慣れるためのスモールステップを設定し分かりやすく指導をされていました。さらに、大きな数や小数の理解では、「位取り板」という教具を駆使し、十進位取り記数法の仕組みを、見える形で理解できるようにしました。

報告の中で、鈴木さんは実際の授業場面を再現しながら、「ここで子どもの目が変わったんですよ」と何度も語り伝えていたのが印象的でした。その瞬間を思い浮かべると、こちらまで胸が熱くなります。抽象から具体へ、見えない計算を見える計算へ。そんな指導原理が一貫しており、子ども一人ひとりに寄り添う姿勢が伝わってきました。参加者の中には「鈴木さんの発明品を見たくて来た」という方もおり、終始熱心にメモを取りながらうなずく姿が印象的でした。報告後には「実践にすぐ使える」「目からうろこだった」といった感想が飛び交い、満足感に包まれた時間となりました。

二つ目の報告は、愛知県の小川慶子さんによる「毎日の積み重ねで自信を持つていく子どもたち」大切なことは何度でも」。小川さんが壇上に立つと、会場が一気に明るくなる

ような、エネルギーシユな雰囲気に包まれました。小川さんが語るテーマは、いつも変わらず「どの子も伸びる」。今回は、昨年度の実践を中心に、クラスづくりや国語を核とした学力づくりの流れを丁寧に紹介しました。

小川さんは、「子どもが伸びるためにまず必要なのは、安心して過ごせる学級である」と力を込めます。そのためには、「ありのままの自分」を受け入れてもらい、自分の良いところを褒められ、認められることが欠かせません。そして、基礎・基本を確実に身につけ、「やればできる」という経験が子どもの中に自信を育て、その自信が「できた！うれしい！↓もつとやりたい！」という学びの意欲を引き出すという言葉を何度も繰り返し伝えていました。

さらに、小川さんは目標設定の重要性にも触れました。卒業時という遠い目標、学年末の中期目標、そし

て学期末の短期目標と、それらを明確に持つことで、子どもも教師も進むべき方向を見失わずにいられるのです。もちろん日常にはトラブルや寄り道もありますが、小川さんは「その行き来も含めて学び」と笑顔で語ります。三学期になるころには、自然と「みんなでいると楽しい」という空気が教室に満ち、子どもたちは互いに支え合いながら伸びていきます。そんな場面が目に見えようでした。報告後には、「パワフルな言葉に圧倒された」「自分も明日からやってみたい」といった声があがりました。

また、基調提案の合間には、参加者全員に「この講座に参加した動機」「現在抱えている実践上の課題」「分科会で明らかにしたいこと」を紙に書いてもらいました。討論の時間には、それら一つひとつを取り上げ、全員で考えを深めました。寄せられた内容はどれも熱意にあふれており、

学級の荒れが続く状況に悩む声、境界知能の子どもへの指導に苦慮している声、授業づくりの新しいヒントを求める声など、現場の切実な思いがにじんでいました。それらに対して、発表者も参加者も真剣に耳を傾け、互いの知恵や経験を惜しみなく共有しました。

会の終わりには、参加者同士が自然と名刺や連絡先を交換する姿が見られ、「今日学んだことを明日の授業でやってみます」「またこういう機会が欲しい」という言葉があちこちから聞こえてきました。一つの報告は、単なる事例紹介ではなく、参加者一人ひとりの教室づくりに直結するヒントに満ちており、実践に生かせる確かな手応えを残しました。今回の分科会が、参加者の明日への一歩を力強く後押しできたことを願っています。

4年生講座まとめ

図書 啓展(ずしよひろのぶ) 大阪みなみ学力研

「10歳の壁をみんなと学力で乗りこえよう」算数

根無信行(大阪)

4年生の学習は、学習用語も抽象的なものを扱うようになり、視覚より言語を中心に学習する内容が増える。「壁」を取り除くのではなく、10歳の壁を乗り越えられる高さまで段階的な土台を築いていくことだ。

大きな数

位取りの法則を歌に合わせて覚えることで楽しく身につかせた。

「♪大きな数は4けたで。一十百千くり返し。万億兆をつけるだけ。大きな数は4けたで。」(大きな栗の木の下での節)ノートのマス目に合わせた位取りカードも活用した。

わり算(筆算)

÷2桁の学習では、計算はみんなで一緒にし、仲間違う前々に修正するように取り組む。「できる」自信をつけてから「わかった」に繋がるように組み立てる。すると計算

にかかる時間の差が縮まり授業のテンポを調整しやすくなる。計算の速度が除外されたら、次はクラスみんなで同じ問題について一緒に考え、意見を出し合い取り組めるようになる。それが「個別化」でなく、みんなを取り組む良さである。

さかのぼり学習」の必要性

わり算のつまずきは一つではない。商立てができない・どの数とどの数をかけるのか・位取り・繰り下がりの引き算・かけ算などあり、計算力実態調査が有効。結果を元に計算力補充の時間をとり、たし算・ひき算・かけ算・わり算(九九の穴埋めも含む)・マス計算のプリントをした。得意な子も苦手な子も他の子ではなく前の自分と比べて伸ばすことを目指して、みんなで同じことをして乗りこえることに目当てがある。計算力の差が小さくなると以後の算数の一斉授業を時間差なく進められるようになる。

取り組み

1 アルゴリズムはみんな声に出して、一緒に唱える

「♪立ってる・かゝける・ひく・おろす・立ってる・かゝける…余りに気をつけて」と「十人のインデアン」の節で歌い身振りもつけて楽しんだ。「わり算忍者」(大達和彦先生作・メール dachi@table.ne.jp)のグッズ(指かくし法の指や仮商修正の「できま手裏剣」なども活用。全員で声を出しながら解いていく時間をたくさんとった。

2 解答を分担して出す。目安を立てる

黒板に式を書く↓商の立つ位を見つける↓商をたてる↓かける↓引く・おろす…と一人ずつ、また列単位で問題を解かせていく「わり算リレー」で慣れさせた。

3 教え合う時間

練習問題を教え合いの中で解く時間も作った。まわりに励まされ、教えてもらう子も頑張る。普段の休み時間では関わりがなかった交流もできた。

小数のたし算・ひき算

位取りのミス防止で、筆算で整数が出て必ず「0」を書かす。「見えないものを見

えるようにする」ことで段差がなくなる。

概数

四捨五入する数字の下に「・」の印をつけることでわかりやすくなる。

計算のきまり

分配の法則を「ふりかけ算」という言葉に変えて指導して効果があつた。

※「かつとばせ！都道府県」も紹介。

【感想文から】

・計算する時にマス目がないと引き算でミスをする子がいたりしたので、慣れるまではマス目のあるプリントにする方がよいのか、4年生だから・・・と思う毎日ですが、子どもの様子を見て柔軟に変えていきたいと思っています。

●「みんなで『できた！』を増やす学力づくり」

り」国語

李詩愛（大阪）

学力づくりは学級づくりにつながる。音読でもペア練習やグループ練習、リレー読みを取り入れている。「頼りになるのはお隣さん」を合言葉に友だちの成長を喜び合える集団づくりをめざしたい。

4年生の鍛えの柱は漢字。読み先行で次に書けるようにする。（読み上げ漢字を参加

者でペアを作り、体験）「つづ書き」は分解し総合する力も養う。テスト勉強は共同で。

授業づくりでこだわってきたのはノート

指導。「手書きは思考力を向上させる。手書きメモの方がデジタル端末より記憶が定着する。」（酒井 邦嘉 東大教授）

ノート指導で大事にしているのは、ていねいに書くことと、自分の考えを書くことだ。視写はとても効果的で、板書をはじめ連絡帳も丁寧に書くことを大切にしている。

「いんぎつね」の学習は「学習展開による授業づくり」（久保 齋）を参考にして進めた。まず、予習の仕方を子どもたちに教える。

① 中心課題の予習

教師主体で次の時間の中心課題を予習に出す。例えば「なぜ、ごんはいわしを投げこんだのだろう」と課題を出し、子どもはノートに自分の考えを書いてきてエンジンを温めながら授業に臨む。中心課題を予習に出すことで、時間をかけて考えられ、考えを深められ、見通しが持てる。

② 一人読み深めの予習

子ども主体で、自分で読み深め、課題を見つける。例えば（疑問）なぜいたずらを昼

でもするのかと思いました。（答え）昼は人もたくさんいたり、明るくてみつきやすい（かつたり）するからです。」

これらの予習を元に授業を組み立てていった。ある子は、初めの感想では「かなしい」としか書けなかったが、授業の中で友達との発表を一所懸命聞き、がんばって自分の意見を伝えようと意欲も見られ、まとめの授業では十一行の感想や主題について自分の意見を書けるように変容した。

単元テストでもどの子もよくできていた。予習に取り組んだことで、学級全体の学習意欲が向上し、しんどい子もやる気になって、全員参加の授業が実現した。

学級は「担任と子どもたち」のコモン・共有財産だ。みんなでかしくなる、ということとをこれからも大切にしていきたい。

【感想文から】

・予習展開の授業について詳しく教えていただきたありがとうございます。今までは「無理だろう・・・」と思っていましたが、今回丁寧にお話いただいて「やってみよう」と感じました。子どもたちと共にチャレンジしてみたいと思いました。

5年生講座 まとめ

広島 古東 秀一

①算数で学力づくりと集団づくり

井川 有香子(大阪)

「算数苦手」「算数いやだな」という声が、学級の中で聞こえてきたことはないだろうか。5年生にもなると、多くの子どもたちは、苦手・得意な教科を持ち、学力格差も大きくなっている。その学力格差、算数嫌いにどう向き合うか。

まず、学習の基盤を整える集団づくりが大切である。「学ぶはまねぶ」「もつべきものはおとなりさん」という合言葉をもとに、みんなで学んでいくという姿勢をつくる。「教えることはかしくなる」「分からないなら教えてときちんと言えること」の大切さを、子どもたちの様子から価値づけて伝えていく。

他にも、朝の会では、友達同士で健康観察を行い、友達を気遣うことの良さを実感させたり、日直のお題でペアトークを行い友

達と話し合う楽しさを感じたりする活動を行う。

このようにして、4月・5月には、学級が心地よい場所になるようにしていく。

同時に、各教科でも学力づくりで集団づくりを行う。今回はその中でも算数の実践を報告する。

授業の最初の5分間は「読み上げ計算」。これは愛知教育大学・志水先生の実践に基づく活動である。一人で黙々と解くのではなく、お隣とペアになって行う。家庭でも宿題として、音読と同様に取り組ませることで、家族を巻き込んだ「脳トレ」となり、保護者も一緒に取り組む姿が見られることも多い。計算力を高める活動が、友達や家族との交流も促しているのだ。

授業は「個別学習(自力解決)→班・グループでの話し合い→全体共有」という流れで進む。特に班で考える時間では、A3用紙

を使って思考をまとめる。この活動を「ペーパーミーティング」と呼ぶ。紙にまとめることで考えが消えずに残り、その過程が見えやすくなる。

授業でまとめた用紙は、教室外の廊下の壁に掲示する。他学年や他クラスの子どものたちの目にも触れるように共有することで、「クラスの学び」が「学年全体の学び」へと広がり、子どもたちの意欲も高まる。

こうして、算数の学力をつける取り組みを通して、集団づくりも行っていく。加えて、教師による価値づけも重要である。子どもたちのがんばりを適切に認め、評価し、言葉がけを行う。そうした丁寧な見取りが、子どもたちを前向きにし、共に高め合うクラスへと導いていくのである。

②国語の授業を核に、

学力の基礎となる「ことば」を育てる

堀井 克也(愛知)

みなさんは、良いクラスと言われてどんなクラスを思い浮かべるだろうか。――

「歌が良いクラスは、良いクラス」そんな想

いから、合唱の取り組みを始めた。歌を気持ちよく歌えたり、みんなでそろえて歌ったりする。その過程で、クラスの団結力や高め合う力は育っていく。

「みんなで歌を歌おう」という取り組みが、やがて休み時間にも波及し、他学年の子どもたちも巻き込むようになった。最初はクラスの活動だったのが、今では「合唱サークル」となり、休み時間にも自主的に活動している。

歌った曲は、「ほらね」（伊東恵司 作詞／松下耕 作曲）、「大切なもの」「絆」「あさがお」（山崎朋子 作詞・作曲）など。

たとえば「ほらね」は、東日本大震災の後、「歌で日本をつなげよう」「被災地を応援しよう」と作られた曲である。「あさがお」の歌詞やメロディーは、特に6月・7月の女子児童に心に響くようである。

こうした合唱曲の中にある歌詞も「ことば」である。歌が良くなるというのは、その中にある歌詞、「ことば」に心が動かされているということである。この「ことば」はある一説によると、脳の物理的構造に影響を与えるという。

では、教師は学級の中で「ことば」をどう生かすか。

第一に、子どもたちの日常を「教師のことば」で価値づけることである。その具体例が「学級通信」と「今日の一枚」である。

学級通信では、子どもたちの日常の様子を写真と共に載せ、そこに価値づけの言葉を添える。たとえば、「望ましい姿」「目指すべき姿」などを示し、学級全体でイメージの共有をはかる。

発言を迷っている子に対しては、「迷えるって素晴らしいことだよ」「迷うってことは、やってみようとしている証拠だよ」と声をかける。さらに、「トライできた自分と、できなかった自分。どっちが好きになれるそう？」と問いかけることで、挑戦する価値を伝える。

このとき、学級に掲示していたのが「迷ったら、やる!」という言葉。掲示によって、子どもたちが「この言葉を見たから挑戦してみました」と言ってくることもあった。また、「ことば」の「語彙」を増やしていくことも大切である。語彙を身につける有効な活動の一つとして漢字指導を行っている。

①漢字テストは百点を目指す。

↓5年生で習う漢字を、網羅的に示し、学習の見通しをもたせる。

②読み合う。

↓ペアで漢字を読み合う。リズム漢字や漢字ドリルの文章、塾語など。

③遊びながら楽しく学ぶ。

↓国語辞典で辞書引きや熟語しりとり、コトバト（小学館）等で、楽しく語彙を増やす活動。

である。他にも、「一道」の前後に漢字一文字置き、熟語を作る活動や、名文暗唱で枕草子等を覚える活動などを通して、語彙を増やしていく。

語彙を増やし、子どもたちの「ことば」を耕すことで、学級がどんどんかしくなっていく。このかしくなるということが、子どもたちに快適な情動を味合わせるのだ。心地よい学級は、子どもたちを高めつなげていく。そんなことを感じさせる報告であった。

六年生講座まとめ

荒井賢一

加藤英介先生・学力づくりで学級づくり

「子どもの思いにどう応えるか」算数」

問題行動を起こす子どもたちに対する上で、加藤先生は「その子の見えない過去を想像する」そうだ。

生徒指導を学習指導へとシフトとしていき、その子の興味あることを授業の中にいれていく。

【算数授業の流れ】

計算練習（マス計算・読み上げ計算）↓
今日の課題（問題把握）↓めあての設定↓
みんなで解き方を知る↓ペアで確認する↓
練習問題（一人学び）↓振り返り

一定の継続的な学びが子どもたちを安定させていく。

（受講者の感想）

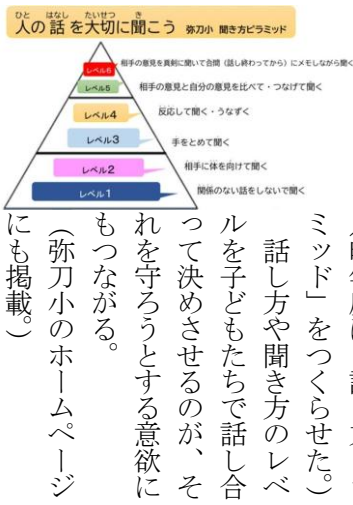
6年生という発達段階の子どもたちにとって、加藤先生の仰られるように、子どもと相談して一緒に決めて（子どもに決め

させて）、それを支援していくことが大切だなと実感しました。また、不登校の子への支援のお話、とても参考になりました。スキルではなく、教師としてのスタンスについて考えを深めることができました。

岡本美穂先生・学力づくりで学級づくり

「子どものことばでつくる授業」国語」

四月十二日、学年合同国語の中で、学校の「聞き方ピラミッド」を子どもたちに作らせる。



単元の初めに学習のゴールを示す。物語教材の初発の感想で、「このお話は」という物語です。」を書かせる。

言葉でつながる国語授業とは？

音読で「できる」経験づくりをさせ、

授業のめあてを全員発言し、

教師の言葉を聞いて指示どおり書ける。

伝え合う力が学級づくりにもつながる。

（受講者の感想）

岡本美穂先生の講座では、国語の基礎体力を鍛えることが学力を伸ばすということを知りました。GIGAスクールの中でも、昔から大切にされてきた音読・視写。このトレーニングが読解力を伸ばすというシン読解力のエビデンスに納得しました。華やかなアクティブラーニングを実現させるように目指しつつも、学力の基礎となる音読・視写を取り入れ、土台の固まった実践をしていきます。

☆十三名の参加でした。

問題行動を起こす子にどう関わっていくか、不登校の問題や学力格差をどうするか、学校づくりなど、実りの多い講座だった。

「多様性と共生」

3 時間、2 本のレポートでしたが、満席十五名の参加で充実した分科会となりました。

△内田さん（京都洛友中学）報告△

徐々に全国で広がりがつつある「多様化学校」の概要が紹介されました。昼間部と夜間部を併設している洛友で、様々な辛さ・事情を背負って登校してくる「子や大人たち」に、「楽しく意欲を持つて学べるよう」心を砕いてどのように工夫しているかがわかり易く映像も交えて紹介されました。教職の方の感想文でも、「不登校生への支援が具体的にどのような形なのかを知れた事は大きな収穫。」とありました。生徒へのアンケートに「心底、学びたい。今過ごしている日々を大切と感じた。」との回答も多かったと。生徒達の作文から、内田さんが「洛友の学びが生徒自身を振り返る機会になっている、

と感じている」と述べられた事はとても重い言葉だと感じます。洛友を卒業して高校から大学に行き、そしてそれからボランティアになって戻ってくる子が結構いることや、余り洛友で登校しなかった子が高校で素晴らしく成長している例等も紹介されました。「普段の授業でどれだけ自分が解っているか自覚できているかがとても大事だ」と内田さんが留意している観点、そして「自分に合った所で学ぶことが大切だ」と締めくくられました。

△小山さん 報告△

来日した多国籍の子たちの直面している日本語習得の困難さが、具体例を示しながら述べられました。国策で呼び寄せておきながら、そのサポートは真にお粗末であることが、小山さんの授業での指導の困難さからわかります。「年教えて「ジュース」が言えない、1 年生に学期来日の子はスラスラ読めるが意味理解せ

ず。話していても油断できない。」「12 歳（12 歳位で母語がしっかりしてから来日した方がいい、結局、母語▲だと日本語の定着も▲」との見解も。日本語はとも難しく、文として理解させないと単語だけ教えても意味ないが、その単語（名詞・動詞・形容詞）が示している物・事を理解させるだけで大仕事。特に、助詞は難解。教科書の物語文など、とてつもなく難しい。日本語指導が必要な高校生は一般高校生の 8 倍、非正規労働に就く割合も 12 倍。特別の教育課程ではほぼ個別指導、皆違うので各人に応じた教材準備が要る。週 20 時間で小中生 13 人を指導、内容も宿題も悩ましい。発言でも指摘された「量的変化と質的变化の相応性」から、量も質も必要だと。来日の子たちは、言葉通じず友人もできにくく、家庭と学校との不通が多い現実の中で一生懸命苦しい日々を過ごしている。在日外国人には「学ぶこと」「生きること」。「共生とは？、改めて考えたい」と感想文にありました。

「意欲格差」に負けない！公立小学校へ

事務局長 岡本 美穂

8月上旬に、東井義雄記念館に見学に行ってきました。そこで、「培其根」を読んで感激しました。紹介します。

■『培其根』とは？

『培其根(ばいきこん)』は、東井義雄が教師として、後進の指導にあたった際の記録をまとめた著作集の別巻で、八鹿小学校での実践や校長時代の教育姿勢が詰まった内容となっています。

タイトル「培其根」は中国古典の言葉に由来し、「根を養えば枝葉は自然に茂る」という意味があります。東井先生はこの理念を教育に反映させ、知識や技能を詰め込むだけでなく、子どもの心や生きる力という“根っこ”をしっかりと育てることの重要性を説かれました。

■教育実践の記録と内容

・職員への細やかな指導記録

東井先生は校長として、教師から提出

された週案(一週間の指導計画や振り返り)に、丁寧かつ分量豊かなコメントを返されました。特に、文章が少ない先生に対しては、紙いっぱい、時に裏面まで活用して返書するほど熱心に向き合っていたそうです。このような姿勢により、反発的だった若手教師も次第に心を開き共に教育に取り組むようになった記録が残されています。

・子どもへの敬意ある対応

ある子どもの作文では「落っている」「ミをどうしたらいいか」という問いに対していくら落とされても拾ってやる」という気概が述べられていました。東井先生はそれに対して、「自分は『またか』と思ってしまいが、この子から学べた」といった内容を丁寧に戻されました。このように子どもを対等に尊敬し、その姿勢から学び取ろうとする態度が随所に見られます。

・教育観の象徴的エピソード：

体育倉庫の鍵をかけようという対応案があった際、東井先生は「教育とは、子どもの欲望を奴隷にするのではなく、主人公を育てることではないか」と反対されたそうです。このように、ルールの管理ではなく、心の育ちを重視する教育観が明瞭に表れています。

■教育者・東井義雄の背景と思想

東井義雄先生は兵庫直伯馬地方の農村で教員を務め、後に八鹿小学校の校長となりました。地域の子どもたちと向き合い、教師である自分自身も学び続ける姿勢を貫きました。

「独り来たり独り去りて、一も従う者無し(独来独去無一従者)」という漢文この出会いから、命の尊さに目覚めたことや、愛児の看病を通じて「いのちの教育」に心を寄せるようになったエピソードも伝わってきます。

八鹿小学校では、今も先生方が月ごとに東井先生の詩を紹介するなど、教育的影響が強く残っており、「根を培つ」教育の精神が地域にも根付いていることが分かります。

す。

■館長より 心に残ったこと

・日記、書くこと

文章を書くことにより意欲をうみだす。国語だけではなく。

・評価について

×は小さく。

○は大きく。

◎小さい○それ以外はつけない。

どの子どもも 子どもは星、これが信条だそうす。

評価はやる気が出てこないという意味がない。

子どもの「根っこ」をとらえる評価

「培其根にも表れているように、表面に出てくる知識や技能だけではなく、子どもの心態度生きる力といった根本的な部分を重視しました。

「テストで何点取れたか」よりも、「学ぶ意欲が芽生えたか」「他者と協力する力が育ったか」といったことを評価の中心に置いていました。

子どもと共に行う評価

教師が一方的に判定するのではなく、子ども自身が自分を振り返り、成長を確かめられるような評価を大切にしました。その

ために授業記録や日記を活用し、子どもと「できるよつになつたこと」「これから伸ばしたいこと」を対話する機会を重ねていました。

序列化や選別への批判

成績や内申点を子ども同士と比較や進学選抜の道具とすることには批判的でした。

評価は子どもの可能性を狭めるものではなく、励ましや成長への方向づけになるべきだと考えていました。

生活につながる評価

学校で学んだことが生活や人間関係にどう活かされるかを重視しました。

「勉強のための勉強」ではなく、「生きることに根ざした学び」を評価基準にしました。

東井義雄の言葉(要約)

・点数や成績は授業にすぎない。大切なのは根を育てること

・教師が裁くためにするのではなく、子ども自身が自分を見つめ直すためにある

・評価は子どもを追いつめるものではなく、励ましでなければならぬ

つまり、東井義雄氏は「評価」を子どもを

はかるための道具ととらえるのではなく、子どもが自分の成長を確かめ、次へ進むための支えにするものとして考えていた、ということす。

■評価の具体的実践例

子どもの日記を活用した自己評価

・東井さんは子どもに「生活日記を書かせていました。教師はそれをただ添削するのではなく、子どもの心の動きや成長の芽を見つけて言葉を返しました。

たとえば「友達に消しゴムを貸せた」「昨日より漢字がきれいに書けた」といった小さなことも、教師が認めて励ますことで、子どもが自分の成長に気づけるようになりました。

授業のふり返りを子どもと共に

授業の最後に「今日でできるよつになつたこと」「これから頑張りたいこと」を子ども自身に言葉にさせました。教師は「誰が正解を言えたか」ではなく、「どんな考え方をしたか」「どう変わったか」を重視。その過程で学び合いが見えるようにしました。

比較ではなく成長をみる評価

「他の子と比べてどうか」ではなく、「その子が以前と比べてどう変わったか」を見る。

たとえば計算の速さより、「間違えても最後までやりぬけた」という姿勢を評価しました。この視点は、現在の「形成的評価」プロセスを重視する評価」の先駆けといえます。

生活や道徳につながる評価

東井さんは「勉強は生活の中で生きるもの」という考えを強く持っていました。算数や国語の成果も、単なる学力としてではなく「日常生活や人との関わりに活かしているか」で評価しました。たとえば国語で書いた作文を学級通信にのせて友達や保護者と共有し、「誰かの心を動かした」という経験そのものを評価しました。

東井義雄さんの評価実践は、

●点数や順位でなく、子どもの内面の変化や努力を見ようとする

●教師が一方的に裁くのではなく、子ども自身がふり返ることを重視したこと

●学びを生活や人間関係につなげて評価したこと

が大きな特徴でした。

「生活日記」

東井さんは、子どもに毎日短い日記を書かせていました。内容は「今日あったこと」

「感じたこと」「できるよになったこと」など自由。教師は、誤字脱字を直すよりも子どもの心の動きや努力を見て「コメント」を返しました。

実際の例(要約)

「今日は算数のテストで60点だった。前よりも10点上がったうれしかった。」

東井先生の「コメント」

「点数が上がったのは、最後まで考えぬいたからだね。その姿勢がとても大切です。」

→ 点数より「努力」や「学びの姿勢」を評価して励ましています。

「ふり返りノート」

授業の終わりに「今日の学び」を短く書かせました。たとえば国語の授業なら、「わかったこと」「友達の見え方」など。「まだわからないこと」など。教師はそれをもとに、次の授業で取り上げたり、子ども同士で共有したりしました。

実際の例(要約)

「友だちの考えを聞いて、自分とちがってびっくりした。でもまちがいじゃなかった。」

東井先生の「コメント」

「友だちの考えに気づけたのはすばらしい

成長です。人の考えを大事にできるあなたになっています。」

⇒ 「答えの正しさ」ではなく「学び合う姿勢」を評価しているのが特徴です。

「子どもの変化をとらえる記録」

東井さんは、子ども一人ひとりについて「前よりもできるようになったこと」を細かく記録していました。たとえば「字をいねいに書けるようになった」「人の話を最後まで聞けた」など、学習態度や生活面の小さな変化まで書き留めました。そのうえで通知表や保護者への「コメント」でも「子どもの成長の芽」を伝えました。

ポイント

・子どもの「内面の変化」や「努力」を大切に

する。

・教師の評価は「裁き」ではなく「励まし」。

・子ども自身が自分をふり返り、成長を実感できる仕組みをつくる。

こうした取り組みは、現在のポートフォリオ評価や形成的評価の考え方に繋がっています。

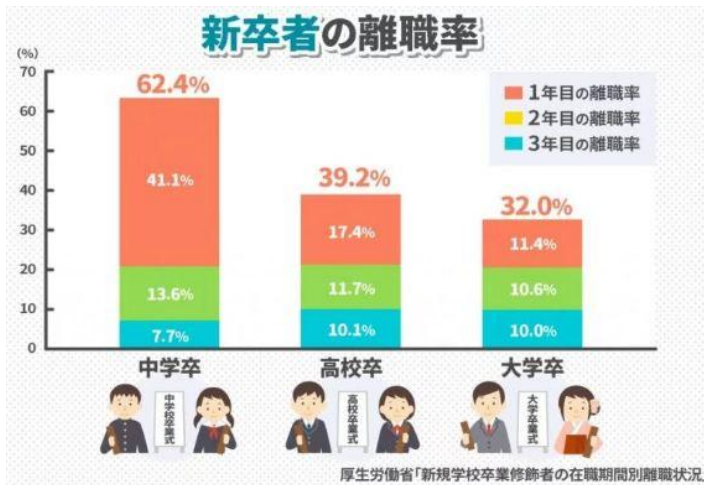
考える力をつけるための授業の組み立て方⑤

大阪教育サークルはやし 荒井 賢一

自分を「ごきげん」にする方法

新卒者の離職率

左のグラフは、新卒三年目まで離職率を表している。



中卒一年目で離職率が40%を超えるのは、何となく分かる。十五・六の子が、職場のルールに合わせて働くのは、難しいだろう。経験も乏しく、精神的にもまだ未熟ゆえに仕方がないともいえる。

しかし、大学を卒業できた約三割もの若者が、わずか三年で離職することには驚く。すでに考える力もついているであろう若者が、まだまだ精神的に弱いわけである。わたしたち教師は、子どもたちに考える力をつけるだけでなく、メンタル面もきたえ、強くたくましい子に育てていくようにしなければならない。

夏の研修会で（7・30考現学より）

昨日、高槻市夏季教育セミナーがあり、全体会の講師として、スポーツドクターの辻秀一さんが話をされた。

講演のタイトルは、「スポーツ心理学から見た人間力の高め方」どうしたら人の心に

火がつくのか」。

今、私が考えているテーマ「困難を乗り越える力をどうつけるか」に関わってくる内容だった。この前の土田さんの講演といい、うまい具合に、自分が求めているものに近いものが、自分で選んだわけでもないのに、飛び込んできてくれる。（ラッキー。）辻さんの話を一言でまとめると、「メンタルは、トレーニングできる」である。

人生の中で、つらいこと、苦しいこと、理不尽なことに出会ったとしても、自分のメンタルを維持できるようにできれば、これらのことを乗り越えることができる。

もし、私が今、目が見えなくなる、失明したら、人生を絶望するぐらいの気分になるだろう。死のうと思うかもしれない。

でも、どんなことが起こったとしても、自分のメンタルをご機嫌な状態にすることは、トレーニングすればできる、と、辻さんは言うわけである。

これだな、と思った。

筋トレと同じように、メンタルはトレーニングできる。要は、それを習慣化しなくてはいけないのである。認知脳ではなく非認知脳を鍛えていくのだ。

授業プラン・自分を「ごきげん」にする方法

【板書】ご□□□

「□」には、かな一文字が入ります。どんな言葉がありますか。」

・ごちそう ・ごほうび ・ごうせつ

【板書】ふ□□□

「最初の文字が「ふ」ならどうですか。」

・ふかしぎ ・ふろしき ・ふうせん

【板書】ご□□□↑↓ふ□□□

「反対の意味になる言葉ならどうですか。」

正解は、「ごきげん↑↓ふきげん」。

「みなさんは、どんなときに「ごきげん」になりますか。」

- ・ いいことがあったとき。
 - ・ テストで百点をとったとき。
 - ・ プレゼントをもらったとき。 など
- 「逆に、どんなときにふきげんになりますか。」

- ・ 外にいるときに雨が降ってきたとき。
 - ・ テストで悪い点をとったとき。
 - ・ 悪口を言われたとき。
 - ・ 約束を破られたとき。 など
- 「辻秀一さんという人が、『自分を「ごきげん」にする方法』という本を書いていました。」(二〇一三サンマーク出版)

「ふきげんな時、「ごきげん」になるには、どうすればいいですか。」

- ・ ねる。 ・ 楽しいことをする。
- ・ ふきげんなことを忘れる。 など

辻さんの本に書かれている「ごきげん」になるための三つのステップを紹介する。

【ステップ一】

自分の感情に気づく。

「朝早くていやだな」と思っても、「早くていやな朝」などというのはそもそもなくて、すべて自分が意味づけしているのだということに気づくのです。

どうして気づくことがこんなに大切かというと、**気づくだけで「接着」された意味が少しはがれるからです。**これが「気づき」の効能です。」

『自分を「ごきげん」にする方法』より
【ステップ二】

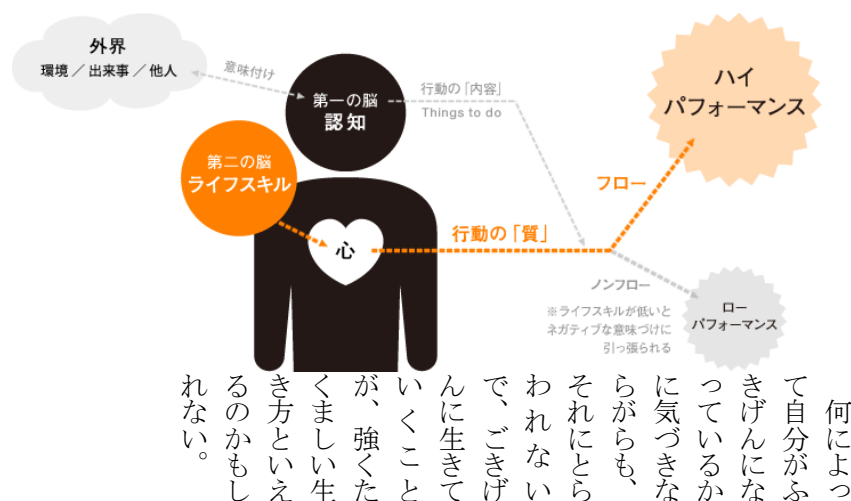
ごきげんの価値を考える。

左下の絵のように、「ごきげんであれば、行動の質が上がり、ハイパフォーマンスの仕事ができる。一方、ふきげんになれば、仕事の質は落ちてしまう。」

【ステップ三】

好きなことを考える。

『ファール昆虫記』を書いたファールは、14歳で家族離散で、一人で食べる物も困る極貧の生活をしていだけれど、好きな昆虫のことを考えることで、くさらず生きていくことができています。



一、社会科とは何か？

第十九回学力研「先生のための学校」

シン先生のための学校宣言

テーマ 現場は厳しい、しかし、教師の創意工夫とその哲学によって子どもたちの学力をもっともつと高め、自治意識に満ちたクラスをつくれるはずだ！

「学力づくりで学級づくり、授業でクラスづくり」を力説する学力研の哲学を学んでいた。だこう！

2月14日（土）社会科で、「低学年社会科課題から3, 4, 5, 6年それぞれの社会科へ」をテーマに学校長久保齋と深澤の二つの講座を通して、「初等普通教育における社会科の学力とは何か、」を学んでもらいたいと思います。

今回は、その時お話をする一端を紹介したいと思います。

社会科という教科は、戦後になってから

生まれました。「修身、地理、歴史（国史）」を廃止し、新しくできたのです。

昭和二十二年発行の「学習指導要領社会科編I」では「今度新しく設けられた社会科の任務は、青少年に社会生活を理解させ、その進展に力を致す態度や能力を養成することである。」と言い、「社会生活の理解において大切なことはその中にある様々な相互依存関係を理解することであり、この相互依存関係は①人と他の人との関係②人間と自然環境との関係③個人と社会制度や施設との関係の3つの面からみていき、・学習過程で特に重視しなければならぬのは、児童生徒の自主的科学的な考え方を育てること、彼らの社会的経験を有効に発展させることの2点である。・社会生活についての正しい理解を基盤にして、さらに自己に対する誠実さ、社会正義の念、人間ら

しい生活を実現しようとする熱意を深めさせていくのが社会科教育の眼目」とされました。

二、社会科の変遷

昭和二十二年三月二十日発行の「学習し指導要領一般編（試案）」において、小学校の新しい教科課程の在り方が示されました。新教科として「社会」「家庭」「自由研究」が設置されて9教科構成になりました。新教科社会科は、子どもの社会的経験をよりどころにして、社会生活についての理解と民主社会の建設を担う社会的態度や社会的能力を身につけることを目指しました。

一年生140時間（週4）二年生140（週4）三年生175（週5）四年生175（週6）五年生175（週5）210（週5、6）**六年生175（週5、6）**国語に次ぐ時間数の多さだった。昭和二十六年改訂で授業時数が四領域に分けられた。社会は②社会や自然についての問題解決をはかる教科として理科と共に位置付けられた。昭和三十年の改訂は、社会科のみの改訂

で、「社会科学学習指導要領補足」や「社会科学学習指導法」の発行がありました。

昭和三十三年の改訂では、道徳教育との関係が再検討され、特に社会科は道徳の時間との関連を図って3、学校教育全体としての道徳教育が徹底できるように示された。授業時数は一年生68時間、六年生140時間と国語、算数、体育に次ぐ教科になりました。

昭和四三年は社会にとって多くの改訂はありませんでした。

昭和五十二年は「ゆとりの時間」として教科の授業時数が削減されました。社会科は四年生か六年生は140時間だったのが、105時間に削減されました。

平成元年の改訂では、大きな変化がありました。一、二年の社会科は廃止され、新教科「生活科」新設されました。国際化や情報化、産業構造など社会の変化に考慮して内容が変わったようです。基礎的な知識・理解はもとより観察・調査などを通して社会科の学び能力をどのように育成していくかが課題となりました。

歴史学習においては歴史上の人物42人

が例示されたのです。人物と関係づけて学習を展開できるようとのこと。社会科の中での国旗、国歌の指導充実がもりこまれたのです。

生活科として一年生は102時間、二年生は105時間。三年生から六年生までは105時間。

平成十年改訂では、総合的な学習の時間が入ったことで三年70時間四年85時間五年90時間**六年100時間**となりました。

三、これからの社会科はどうなっていくのかでしょうか？

戦後できた日本国憲法は、民主的で文化的な国家を建設して、世界の平和と人類の福祉に貢献しようとする決意を示しました。教育基本法はこの精神をうけて、この理想を実現するには、根本的には教育の力にまつべきものと明記されました。

戦後の民主教育の目的は、人格の完成をめざし、平和で文化的な国家・社会の形成者としての能力を備えた健康な国民の育成にあるとされてきました。

社会科は、その中で重要な位置を占めていた教科です。しかし、今回見てきたように、改訂の度に、時間数が削減されています。

久保校長が掲げておられる「**初等普通教育における社会科の学力とは何か**」を今こそ、見つめないといけないのではと思っています。

『学力研の提起する「いつでも、どこでも、だれにでも」できる実践は、その哲学と通底していなければ単にハウツーもので終ってしまい、教師の創意工夫も生まれず、真のクラス最適化も生まれない。**教育方法を学ぶだけでなく、なぜその方法に辿りついたのかの軌跡、哲学を学びことが、創意工夫する教師への道だと考え、共に学び合う学校**としたい。教師の仕事はもっとクリエイティブなものであるはずだ。教師の権能が正當に発揮され、子どもたちのための創意工夫が思う存分発揮できる職場をどのようにに再生し創るのかも共に考えていこう。』

私の思いは久保校長と同じです。2月に向けてこの連載も通じて、皆さんと共に考えていきたいと思っています。

岸 圭介著『学力は「ごめんなさい」にあらわれる』(ちくまプリマー新書)の紹介

金井 敬之

本書の主張

「何回言えばわかるの!」と親が子どもに伝えても、子どもの行動が変わらないのは、子どもに原因があるのではなく、親のことばの教え方にある。子どもが親の言うことを聞かないのは、大人が子どもに、特定のことばの意味や価値を教えてこなかったからだと著者は言う。

ことばには知らず知らずのうちに築いてきた価値観が反映されている。ことばに対する価値観が子どもの行動を決定していく。大人が気づかないうちに、子どもはことばの意味を誤って学習していることがあるので、ことばの意味と価値をどう伝えていくかを考えなければいけない。学びの土台がことばの理解にある。ことばの理解が学力につながるのである。

そのことを「ごめんなさい」「しずかにし

なさい」「おはようございます」「もう書けたよ」「すらすら読める」「テストの見直し」という事例で説明している。

「ごめんなさい」

ことばの意味には「軽さ」と「重み」がある。「ごめんなさい」も状況や程度によってその重みが変わってくる。それがうまく子どもに伝わらないので、子どもが「ごめんなさい」と言っても、また同じことをくり返すのである。ことばの重みを子どもに伝える(価値づける)ことが親や大人の務めである。大事なことは「ごめんなさい」を言わせることではなく、「ごめんなさい」と言わなければならない状況を正確に認識させることである。ことばは、使う人の気持ちやこれまでの経験がはつきり表れる。人と人とがわかり合えるかどうかは、ことばの使い方の問題に集約される。

「しずかにしなさい」

聞くこととしずかにすることは別問題である。授業では、しずかにしなさいと教師が子どもに言うのは、先生や話す子の言うことを聞いてほしいという意味がある。

しゃべっている子は、話を聞いていないのかというところでない。聞いているからこそ、おしやべりをして反応しているのである。そのような子を黙らせてしまうと、話を聞かずに黙っているだけになってしまいう危険性がある。

また、親が子どもの話を片手間に聞くと、子どもは話を片手間に聞いてもかまわないということ学ぶ。聞くことは、話している人の気持ちを考えるという「相手意識」の上に成り立っている。聞くことは、話の内容に興味関心があるかないかの観点ではなく、相手意識をもつかどうかが大切な意味をもつのである。

「おはようございます」

人と人との関係は、ことばの意味と価値を同質のものとして扱う者同士の方がうまくいく。ことばづかいが汚い人との時間が長くなれば、思考や行動パターンも自然と

似てくる。ことばづかいは人間関係づくりに大きく関わっている。子どもは多様な関係の中で学んでいくので、あいさつは「特定の誰か」だけではなく、むしろ「まだ知らない誰か」にしてこそ可能性が広がる。誰とでもやりとりができる子は、人から学ぶことの価値を自然に学んでいく。

「もう書けたよ」

子どもが字を早く（著者は速くの意味合いで使っているようだ）書くことだけをほめると、ていねいに書くことを疎かにしてしまう危険性がある。子どもは字を書く練習を通じて学習に向き合う姿勢を学んでいるので、字をていねいに書くことはていねいに生活することにつながり、乱暴なことばづかいや物の扱いをしないことが多い。「早くしなさい」と言われると「早く終わらせる」ことが学習の目的になってしまう。テストの点数の結果だけを評価すると、子どもは点数さえとればいいと思ひ込んでしまう。

自分の名前をていねいに書くことも重要である。自分の名前をていねいに書く習慣が付いていない子は、漢字や計算でも取り

組みがいい加減になる。自分が書いて提出するものは誰かが目を通すものだという他者意識があるなしの差がていねいさに表れる。

「すらすら読める」

すらすら音読できることと内容を理解できていることとはちがう。声に出して読めるからといって理解できているとはかぎらない。淀みなく読めることだけを親が評価すると、子どもはすらすら読めることが音読なのだと思い、内容を理解することが疎かになってしまう。内容を考えながら音読すると、すらすら読めないこともある。

「テストの見直し」

テストの見直しができないことが、算数ができないこととながっていることがある。「見直し」といっても、解答の記入漏れをチェックすることなのか、答えの大体のあたりをつけることなのか、問題を解き直すことなのかで、結果にちがいが出てくる。「見直し」ということばの理解の認識のちがいである。

「解けること」を学習のゴールにしてしまうと、多様な解き方を考えないことにつな

がる。社会に出たときに求められることは、問題を解くだけでなく、問題を多面的に捉えて解くという視点ではないか。

本書に貫かれていること

しずかにすること、速く書けること、速く問題が解けること、すらすら読めることで考えることをしなくなったり、ていねいに書くことを怠ったり、異なる解法を考えないようになったり、書いてある文章の内容を考えなくなったりすることにつながるという指摘である。深く考えるからこそおしゃべりをしてしまったり、書くことや読むことや算数の問題を解くことが遅くなったりすることがある。課題を速く正確にすることは、学校で求められていることであるが、その問題点を明らかにすることは、著者の高い見識だと思う。ただ、子どものそのような行為が深く考えているからなのか、学習が困難であるからなのかの見極めは教師にはできるはずである。彼の主張を正しく理解していないと、遅くてもよい、すらすら読めなくてもよい、できなくてもよいという学力格差につながるのではないかと心配である（考えすぎかもしれないが）。

局長だより 9月

◇学力研最新情報 岸本 ひとみ

●2学期スタートは順調??

8月下旬から2学期が始まる地域の方にとっては、本格的な授業が始まっている頃だと思えます。

2学期のスタートは、順調でしたか?また、1学期末に、どうもうまくいっていないような気がすると感じておられた方、雰囲気は好転しそうですか?

2学期は、9月から12月までの長丁場です。どんなクラスでも、山あり谷あり、トラブルが出てこない2学期だった、なんてことはないはず。むしろ、出てきて当然とゆったりかまえている方がいいかもしれません。また、トラブルが出てきた時は、それがチャンスと考える切り替えもポイントです。

●学力実践で乗り切る

困った時の学力実践、というのが長い間に身につけた処世術です。例えば、基礎計算です。マス計算、割り算ABC型の問題があれば、全学年に適用できます。

基本は、クラスの子ども全員が

何とかできそうな問題を選ぶことです。全然解けそうにない子どもがいる時は、その子に個別に練習の機会を設けて、できるようにしてからクラス全体で取り組めばいいのです。または、前学年や、2学年下の課題に取り組むのもOKです。4年生でも、マス計算かけ算にチャレンジすればいいのです。

合言葉は「昨日の自分に克つ」です。自分で自分を褒めることができる、クラス全体でも喜び合える、そんな空気を醸成することが目的なのです。

●起死回生への第一歩に

高学年の十一月危機に、割り算C型を導入してみ、何とか年度末まで持ちこたえることができたという経験が何度かあります。迷っている方、騙されたと思って、一カ月チャレンジしてみてください。ブツブツ文句を言いながらも、懸命に取り組む姿に、指導する側も励まされること請け合いです。

◇事務局だより 岡本 美穂

明日の授業が楽しみになる

先生のための学校

仲間と学び合う

先生の場合ようこそ

日々子どもたちと向き合う中で、「もっとよい授業をしたい」「子どもの学びを深めたい」

そんな思いを持ちながらも、一人で悩んでしまうことはありませんか。

先生のための学校「学力研」は、教師が教師のために学び合う場です。

授業づくりの工夫や子ども理解のヒントを、実践を持ち寄りながら仲間と語り合えます。

ここで得られるのは、知識だけではなく、

「明日、子どもに会うのが楽しみになるそんな元気と確信です。」

ぜひ一度、学びの輪に加わってみませんか。

日々子どもと向き合う先生方が「ほっと一息つける場所」です。

授業づくりの工夫や子どもの学びを深めるヒントを、仲間と語り合いながら見つけていきませんか?

一人で悩むより、みんなで学び合うほうがずっと楽しく、力になります。

ここには、実践を持ち寄り、学び合い、互いに高め合う仲間がいます。

「授業づくりのスイッチ」を押しに、ぜひ一度のぞいてみませんか?

先生が学びと、子どもも輝く

明日の授業が楽しみになる学びの場

ひとりじゃない、仲間とともに学ぶ学校

それが「先生のための学校」です。19年目をむかえます。

9月13日(土)算数科

「初等普通教育の算数とは何か、どう教えるか」

講演11:30~14:15

岡本美穂と言えば「板書、ノート指導」「国語専門」と思いきや実は算数にも深い実践家でもある。今回はその算数の実践を思う存分語ってもらおう。

講演214:20から15:05

「算術から算数へ」の原理で、11からのトトロの歌、ダミ数字による文章題指導、演算決定指導、創作類似問題で深める授業づくりなど1年から6年までの算数の原理原則を語る。

学力研カレンダー

《各地のサークル・部会

2025年 9月

例会、イベント》



どなたでもご参加いただけます。お誘い合わせのうえお越しください。お待ちしております。

※会場等使用状況により、変更の可能性もありますことをご了承ください。

9/

- | | | | |
|--------------------|-----------|-------------------|---------------------------|
| 19 (金) 伊丹学力研 | 18時半～ | ※阪急武庫之荘駅近く | 前田 090-9715-3830 |
| 20 (土) 大阪教育サークルはやし | 午後 | エルおおさか | 荒井 aik28501@bca.bai.ne.jp |
| 26 (金) いろえんぴつ (加印) | 18時半～ | なんなん広場会議室 | 岸本 090-9117-6330 |
| 27 (土) みなみ学力研 | 9時45分～12時 | 阿倍野区民センター | 図書 nobu580701@yahoo.co.jp |
| 春日井学力研 | 18時半～ | レディヤン春日井 (JR 勝川駅) | 山口 080-6904-1697 |

オンライン開催のサークルには、参加方法を連絡先にお尋ねください。

下記サークルも活動していますので、翌月以降の日程のお尋ね等のご連絡下さい。

- 持ち方書き方研究会 ライン会議で行います。日時や参加のしかたはご連絡を 前田 090-9715-3830

《全国キャラバン等 今後の予定》

○ 学力研・先生のための学校【全6回】

- | | | | |
|------------|-------------|------------|-------------|
| 9月13日 (土) | 13時半～16時45分 | 10月11日 (土) | 13時半～16時45分 |
| 11月 8日 (土) | 13時半～16時45分 | | |
| 2025年 | | | |
| 1月17日 (土) | 13時半～16時45分 | 2月14日 (土) | 13時半～16時45分 |

○ 1年生講座 第7回 9月27日 (土) オンライン

(詳細はメルマガ「まぐまぐ」、「こくちーず」などで)

(講師派遣希望、サークル情報などは 事務局へ 079-426-5133)

ご意見・ご感想は下記まで

- | | |
|-------|-------------------------------|
| 荒井 賢一 | E-mail aik28501@bca.bai.ne.jp |
| 李 詩愛 | E-mail iwamotoshie@gmail.com |
| 堀井 克也 | E-mail katsuya4k1h9@gmail.com |
| 加藤 英介 | E-mail hgrtd533@yahoo.co.jp |